

大東文化大学合同研究会「大河内文庫を考える—大河内一男を中心に—」

第2部 大河内文庫から見えてきた研究課題

「日本政治思想史の立場から～明治社会主義と大河内一男～」

大東文化大学法学部政治学科准教授 萩原 稔

1. はじめに

大東文化大学法学部政治学科の萩原と申します。今回の報告のテーマは「日本政治思想史の立場から～明治社会主義と大河内一男」ということで、話をさせていただきます。

テーマにある「明治社会主義」、別の言いかたでは「初期社会主義」とも言いますが、まずはこの定義から始めたいと思います。その時期としては1901年（明治34年）、日本で最初の社会主義政党である「社会民主党」の結成——これはすぐに政府から解散命令が出ますが、その年から、1910年（明治43年）の「大逆事件」、すなわち明治天皇の暗殺を計画したとして、幸徳秋水をはじめとする多数の社会主義者が弾圧・処刑された事件までの約10年間にあたります。すなわち明治社会主義とは、ロシアにおけるボルシェビキ革命が起こる以前の日本の社会主義を総称したものと見て差し支えはないと思います。代表的な思想家としては、先ほど名前を挙げた幸徳秋水、その同志であった堺利彦、片山潜、安部磯雄、等々の名前が浮かんできます。彼らは、明治政府の弾圧という困難な状況の中でみずからの思想を世に問おうとした人々で、その思想家としての価値は決して現代でも色褪せないものと言えます。

もっとも、私は明治社会主義の思想家たちの研究を専門としているわけではありません。私の研究対象は、1936年（昭和11年）の2・26事件の思想的指導者として処刑された北一輝という人物をはじめ、どちらかというと「右翼」の思想が中心です。よって今回の内容からみれば「右翼と左翼」、いわば「水と油」のような感じを持つ方もおられるかもしれません。

しかし、北一輝という人物は、実は当初は「左翼」、つまり社会主義者としてその思想家としての生涯をスタートさせております。彼は1906（明治38）年に最初の著作『国体論及び純正社会主義』を発表しておりますが、このなかで彼は先ほど紹介した幸徳秋水、片山潜、安部磯雄など、数多くの明治社会主義者の著述を参照しながら、北独自の「純正社会主義」というものを説きました。この本が縁で、北一輝は明治社会主義者とも交流を持つことになり、大逆事件では警察に引っ張られて取り調べを受ける、という目にもあっています。そういう意味では、北もまた明治社会主義者の一員でした。ちなみに、『大河内暁男文庫目録』を拝見すると、北一輝に関する書籍が11冊収録されていることがわかりました。このように考えると、今回のテーマで私のような「右翼」研究者が、「左翼」すなわち明治社会主義についての大河内一男先生の研究について話をする、というのもあながち不適格ではないだろう、ということをお最初に申し上げる次第です。

2. 大河内一男の「明治社会主義」研究の主な業績

それでは、今日の本題である大河内一男先生の「社会主義研究」の特色についてお話ししたいと思います。

戦前の社会主義についての大河内先生の業績として、代表的なものとしては、まず、1963（昭和38）年に筑摩書房から刊行された『現代日本思想大系』第16巻「社会主義」の編纂があげられます。このシリーズは「アジア主義」「マルキシズム」「ナショナリズム」「近代思想」など様々なテーマについて、それぞれの必読の原典資料を収録したもので、日本政治思想史を専攻するものにとっては重要な資料集です。そして、幸徳秋水の全集刊行に際しては編集委員を担当され、第3巻では幸徳秋水の著作である『二十世紀の怪物 帝国主義』についての解説を執筆されています。さらに単著として、1972（昭和47）年に講談社現代新書から『幸徳秋水と片山潜』というタイトルの本を出版されています。この3つが、大河内先生の日本政治思想史に関する主要な業績であると言ってよいかと思えます。

3. 大河内一男の見た「明治社会主義」①：3つの源流

大河内先生は、これらの研究において、明治社会主義の源流として3つのグループを説明しています。1つは自由民権運動の流れから来るもの。中江兆民の弟子であった幸徳秋水はこれにあたります。2つ目はアメリカの労働組合主義の影響を受けたもの。これにあてはまる人物が、アメリカに長く滞在していた片山潜です。そして、3つ目としてキリスト教的な改良主義、ないしヒューマンイズムという流れから来るもの。典型的な人物としては、キリスト教の学校である同志社を卒業した安部磯雄などがあげられます。

大河内先生は、この三者がそれぞれの意識の違いはあったものの、「平和主義」「非戦論」というひとつの軸を中心に、団結を作り上げることができたと評価しています。先に挙げた幸徳秋水全集の解説で、大河内先生は幸徳秋水の『二十世紀の怪物 帝国主義』（1901年）について、当時の時代状況もふまえながら次のように記しています。

明治二十七、八年（1894—95年）の日清戦争における勝利、その後の産業の発展と対外的地位の上昇といふ事実、そして明治三十二年（1899年）の条約改正（治外法権の撤廃）……と結びついていた外資導入と「内地雑居」に対する不安と不信、その半面である排外思想の存在、これらの事情は、日本の社会主義運動をして、鮮明な反戦運動として展開せしめるには甚だ不適當な状況であった。その点において幸徳の本書は特異な価値をもっている¹

そして、多くの国民が戦争を支持していた日露戦争に対する社会主義者の「非戦論」についても、その強烈さと純粋さを高く評価しています。

¹ 「反戦の書『廿世紀之怪物帝国主義』」『幸徳秋水全集』第3巻、明治文献、1968年、422頁。引用文中のカッコ内は引用者による注

4. 大河内一男の見た「明治社会主義」②：「左右」両派の対立図式

しかし、「平和主義」ないし「非戦論」による社会主義勢力のまとまりは、日露戦争後になると崩れていきます。大河内先生は、社会主義勢力が2つのグループに分裂していったことを描き出しています。

1つは幸徳秋水を中心とする「直接行動派」ないし「左派」。もう1つは片山潜を中心とする「議会主義派」ないし「右派」です。後者は、過激な運動を展開して弾圧されるよりも、議会を活用し、国民の支持を通じて多数の議員を国会に送り込むことにより社会主義が実現する、と唱えます。それに対し前者は、議会を通じての変革はあまりに迂遠である、労働者のストライキを通じて社会変革を行うべきである、と論じました。もともと幸徳秋水は「社会民主党」を結成した時期は議会の有効性を信じていましたが、日露戦争後は「直接行動」を声高に唱え、そのカリスマ性もあって、社会党の中では「直接行動」論が多数の支持を集めました。もっとも、このことが政府当局の警戒感を強め、その結果として社会主義運動はさらなる弾圧を受け、それに抗する形でさらに過激な方向に向かう人間も現れ、その結末が大逆事件だった、という流れになるわけです。このような流れについて、大河内先生は『幸徳秋水と片山潜』という、まさにこの左右の指導者について取り上げた本の末尾で、次のように語っています。

「社会主義」のなかで、なぜ左と右との分派の対立がすぐできあがるのだろうか、そしてさらに、なぜ日本では、左派の非合法主義と「直接行動」主義に多くのものが拍手を送るのだろうか。……明治、大正、昭和を通じて、また戦前、戦後を通じて、いつの世でも、非合法主義を旗幟とする左派＝「幸徳派」的な存在は圧倒的に優位を占め、反対派の右派＝「片山派」的なものは、劣勢だったと思われるのだが、その理由はどこにひそんでいたのだろうか²

5. 思想研究と同時代の政治状況との結びつき

このような問いは、明治時代にとどまらず、まさに大河内先生自身が生きた時代、すなわち戦後の「社会主義」政党である日本社会党のあり方にも通じるものでした。それを示すのが、1959年（昭和34年）1月23日、内外情勢調査会の埼玉支部での大河内先生の講演です。この記録は小さな冊子としてまとめられ、本学の図書館の書庫棟に所蔵されています。ここで大河内先生は、次のように語っています。

つねに日本の過去の社会運動の不幸は、右派と左派の対立のなかで、左派が優勢で右派が劣勢、いつも現状に反発しては「実力行使」で自ら墓穴を掘るような結果をくり返してきたという点であります。戦後の現在でも、そうしたかたむきが労働運動なり、社会主義運

² 『幸徳秋水と片山潜』講談社現代新書、1972年、250頁

動の陣営のなかには強いと思うのですが、やはりこれは明治以来の日本の「伝統」のようなもので、こうした伝統が徐々になくなっていくことが、日本のように高い生産力をもち近代化した面の強い産業社会の場合の、一つのすすむ方向だと思うのです³

すなわち大河内先生は、議会を基盤とした——つまりはより広い範囲に支持されることによって自民党に対抗しうる政党として社会党に期待する、という立場に立って、議会政治よりも直接行動に傾きがちな「左派」を批判したわけです。その意味では大河内先生のスタンスは明確です。ただし、この講演の4年後に大河内先生が編纂した筑摩書房の『現代日本思想大系』に収録した日本の社会主義者の文献の一番最後に、社会党の「右派」に分類される江田三郎の社会党再建策である「江田ビジョン」の文章と、「左派」の理論的支柱として知られた向坂逸郎の論文をともに収録しています。すなわち自分の考えと違うものを排除するのではなく、現代の社会主義政党における2つの見方を示すことで、そのいずれがより妥当性があるかを暗に読者に示す、という構成を取っています。このような姿勢は、学者として良識的であるように感じます。

しかし、よく知られているように、結果的に江田三郎は社会党の主流とはなりえなかった。このことをふまえつつ、大河内先生はあらためて「なぜ社会主義において『左派』が主流を占め、『右派』が傍流となるのか」を広く問いかけ、多くの読者に考えてもらうために、1970年代に新書という形で『幸徳秋水と片山潜』を執筆されたのではないかと感じます。

ちなみに、冒頭で触れた、私が研究対象としている北一輝は、その著書『国体論及び純正社会主義』で、社会主義を実現する方法として、普通選挙の実現を前提とした、議会を通じた社会主義革命を提唱していました。しかし、現実の政治権力による弾圧や、明治社会主義の「弱さ」、さらに宮崎滔天などの影響による中国の辛亥革命への参加とその経験などを経て、天皇を擁した軍事クーデターによる「国家改造」を打ち出した『日本改造法案大綱』という書物を書き、2・26事件を引き起こした軍人や、右翼思想家たちに大きな影響を与えることとなります。その思想的な転換は社会主義を論じた幸徳秋水とは真逆にも思えますが、しかし議会を通じた変革を放棄し、実力行使（場合によっては「暴力的手段の行使」）による変革を目指したという共通点を、「左翼」「右翼」という枠組みとは別に、幸徳と北は持っていたのかもしれない。

このような動きも頭に置きながら、明治社会主義に関する大河内先生の分析を考えてみるにつけ、議会のあり方や、社会主義の位置づけが明治時代と現代とは違うとはいえ、現代における議会政治の意味を考えるうえでも、大いに示唆に富むのではないかと思います。

³ 『社会党と社会主義（内外情勢調査会講演シリーズ 83）』（内外情勢調査会、1959年）47-48頁。
旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。

6. むすびにかえて

大河内文庫には、明治社会主義関係の原史料は、現在整理されているかぎりではあまり見当たりません。しかし、大河内先生が幸徳全集や『幸徳秋水と片山潜』の執筆の際に使ったとみられる大逆事件の判決書や起訴状などのほか、幸徳の故郷の高知県中村市で行われた大逆事件後 60 年の追悼会に参加した時の資料などもあります。その他、幸徳の遺族からの礼状や、幸徳の墓碑の拓本など、個人的に興味深いものもありました。

また、大河内文庫には、戦時中の植民地関係の資料や、軍関係の資料など、じっくり腰を据えて読めば面白い発見ができそうなものも多くあります。さらに整理が進み、また思いがけない発見があればいいなど、作業をしない立場から勝手なことを言わせていただきまして、私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。